

よりあいつうしん

19号

発行元

宅老所よりあいつうしん課
〒814-0104 福岡市城南区別府7丁目9-22
092-845-0707

場に宿る力

～第2宅老所よりあいから～

スミ子さん

第2宅老所よりあい
管理者 緒方眞弘



エッチーなクッキー
「スミ子さん、一緒にクッキー食べませんか？」
「クッキー？クッキーって何ですか？」
突然の誘いに、訝しげな顔で答えられる。
「クッキーじゃなくて、クッキー。き、です。き。」
「クッキーでしよ？クッキー。ち、ちーちー。」
周囲がクスクスと笑い出す。
「だ、か、ら、クッキーですって。お、か、し。」
ちよつとムキになる。
「ネットじゃない？」笑いながら誰かが言った。
「ネット？へえー」スミ子さんは感心したように頷かれています。
「ヨッシーじゃない？」また誰かが言う。
「ヨッシー？？」更にスミ子さんは考える。
また他の誰かが「エッチーでしょ？あはは」と言う。
「まあっ？」

一気にみんなが活気づく。広間は「クッキー言い間違いゲーム」になっていた。私が「男は助平くらいがちょうど良いですかね？」と聞くと「そうですね、あははは」と笑顔。
「一緒にクッキーを食べませんか？」は伝わらなかつた。その代り、笑いが起つた。
スミ子さんは笑いながらもうクッキーを食べていた。

ハッピーちゃん
一緒に過ごしていると、スミ子さんのことが段々と分かってきた。
スミ子さんはとても怖がりなのだ。
体を触られる時も、特に何も無くても、「私は怖がりなんですー」「いやー！」「怖いー！」「何するのー！」良く通る声で、職員をバシバシ叩き大騒ぎ。
その怖がり方が、怖かつた。
初めての泊まりの夜、私は気を張る。
薄灯りの中、寝息を立てているスミ子さんの隣で気配を消し、座って過ごさせ

てもらおう。
別の部屋から物音がしたので見に行こうとすると、スミ子さんもぼつと顔を上げた。
「大丈夫よ、私も寝ているから、ここに居て良いの、ねー」
寝ていると思っていたスミ子さんは、私の気配を感じ遣い見守ってくれていた。その言葉が凄く嬉しい。
「ありがとうございます、ちよつと見てくれるだけでいいから」
「うん、大丈夫だからね、ハッピーちゃん、ここに居ていいからね」
「どうやら私を、家で一緒に暮らしているダックスフントと思われるらしい。」
私はスミ子さんを守っているのか、スミ子さんに守られているのか。
お互い様と感じて肩の力が抜けた真夜中。

お別れ
何が起こつてもおかしくない年齢と体。スミ子さんの暮らしは続く。
トイレにはちゃんと行く。スミ子さんの暮らしを最後まで支えることで、職員がひとつになつていった。
ある朝その体が急に異変を起こし、娘さん、主治医の先生にも駆けつけてもらった。
看取りが迫っているのか、持ち直すことが出来るのか、誰にも分からない。
娘さんと一緒に横にならされているスミ子さんの体をさすり、一息ついた。ちよつとそのタイミングでスミ子さんの息づかいが変わる。「お母さん」と呼びかける娘さんに、穏やかな顔を見せ最後の呼吸を終えられた。娘さんは小さな声で、

「何か…あつけなかつたですね。」と仰った。
外は蝉の鳴き声が聞こえるのんびりとした昼下がり。91歳だった。
翌日、スミ子さんは家に帰る事になった。
送り出す前に職員の首頭で馴染みのある人が集まり、お別れの会を開いた。
スミ子さんの好きな葡萄と熱いお茶を全員でいただき、五年六か月の思い出を語り合う。
ひとりひとりがスミ子さんへ献花し、自分の言葉でお別れの挨拶をした。
「母はここを選んだのだと思います。願いが全て叶いました。ありがとうございます。」
集いの場に迎える朝は、座ってもらう椅子から考え、使うクッションを工夫した。姿勢が崩れると一人が抱き上げて、その間にもう一人がクッションの位置を整えた。
傷口はきれいに洗い流し、軟膏を塗り保護材を貼り代える。
トイレにはちゃんと行く。

「何か…あつけなかつたですね。」と仰った。
外は蝉の鳴き声が聞こえるのんびりとした昼下がり。91歳だった。
翌日、スミ子さんは家に帰る事になった。
送り出す前に職員の首頭で馴染みのある人が集まり、お別れの会を開いた。
スミ子さんの好きな葡萄と熱いお茶を全員でいただき、五年六か月の思い出を語り合う。
ひとりひとりがスミ子さんへ献花し、自分の言葉でお別れの挨拶をした。
「母はここを選んだのだと思います。願いが全て叶いました。ありがとうございます。」
集いの場に迎える朝は、座ってもらう椅子から考え、使うクッションを工夫した。姿勢が崩れると一人が抱き上げて、その間にもう一人がクッションの位置を整えた。
傷口はきれいに洗い流し、軟膏を塗り保護材を貼り代える。
トイレにはちゃんと行く。

「何か…あつけなかつたですね。」と仰った。
外は蝉の鳴き声が聞こえるのんびりとした昼下がり。91歳だった。
翌日、スミ子さんは家に帰る事になった。
送り出す前に職員の首頭で馴染みのある人が集まり、お別れの会を開いた。
スミ子さんの好きな葡萄と熱いお茶を全員でいただき、五年六か月の思い出を語り合う。
ひとりひとりがスミ子さんへ献花し、自分の言葉でお別れの挨拶をした。
「母はここを選んだのだと思います。願いが全て叶いました。ありがとうございます。」
集いの場に迎える朝は、座ってもらう椅子から考え、使うクッションを工夫した。姿勢が崩れると一人が抱き上げて、その間にもう一人がクッションの位置を整えた。
傷口はきれいに洗い流し、軟膏を塗り保護材を貼り代える。
トイレにはちゃんと行く。

よりあいの食事はお年寄り一人一人に合った食事の在り方を心掛けています。
何処でも当たり前前に心掛けていることではないか、と思われるかもしれませんが、確かにそうだろうと思います。お年寄りがより快適に食事ができるように、食べる場所・時間・使うもの等、その方に合わせて考えられていることでしょう。…とは言え、お家でご飯を食べるとき、自分たちはどんなものでご飯を食べているのでしょうか？それぞれではあると思いますが、例えば器がプラスチック、お箸やスプーンがシリコン製で食べるとするならば、何をもちいて使うのでしょうか？それが使いやすい？落として割れにくい？口に当たって痛くない？などでしょうか。もちろんそんな理由でそれらを使う方もおられるでしょう。私が専門学校に通っていた時に、ある施設へ実習に行かせていただきました。そこでもお年寄りにあった介助をされているという事で、学びの為に食事のお手伝いをする事

になりました。
あるお年寄りが食事をされる際、シリコンのスプーンを使われていて、単純に何でだろう？と思いついた。確かに返ってきた言葉に正直ショックを感じたのを覚えています。「この人は口を開けてくれないからスプーンを口に入れる時当たっても大丈夫なようにこれを使っています。安全だから」というものでした。

お年寄りに合わせることで感覚がずれている様に感じましたが、実習生という事もあり、その時はモヤモヤとしたものを感じたままでいました。よりあいで、どなたもそのような道具は使わず、いわゆる普通の陶器などの器を使い、金属のスプーンやお箸を使って食事をされます。自分で箸やお箸を持つのが難しいような方も、器を変えを持つて食べられます。でもそれは、同じ陶器などの器を小さめのにしたり、軽めのものに変えると言うものです。
食欲があり、ご飯を食べるという事は生きていく喜びにも繋がる大切なことです。何に気を付けるべきかはそれぞれ違うでしょう。でもこちらの都合や間違つた解釈で、お年寄りに関わらないように心掛けたいな、と思つています。
千原佳子（入職2年）

このたび第2宅老所よりあいのつうしん担当となりまして、昨年からの縁あつてよりあいに勤務しているペーペーのくせに、職員であることを半ば忘却し、お年寄りの間に完全なまでに溶け込み、ちよつかり充実した楽しいよりあいの生活を送らせていただいております。それゆえに今回のつうしん課への突然の配属は、「ちよつとはまじめな仕事をしなさい」というお告げであると、そのように受け止めております。
私はもともと発信力に乏しく覇気のないもやしっ子なのですが、よりあいの歴史と共に脈々と続いてきたつうしんが、今後も宅老所の日常を広く知っていただくと同時に、お年寄りに関わることで見えてきた社会が抱える様々な課題を、読者の皆様と一緒に考え、深めていけるようなプラットフォームになればいいなと考えています。
敬愛している小説家の保坂和志さんは、「プロとは経験を頼りにためらわずに自ら仕上げてしまおうな人間のことではない、戸惑い途方に暮れるようなやり方を自分から引き受けられる人間のことだ」と仰つていました。
入職して2年、よりあいに關わる諸先輩方の在り方は、まさにこの言葉を体現しているように感じています。
そして刻々と締め切りが迫つてきている現在、私はパソコンのキーボードに指をのせたまま、隣接する五社神社の巨木から、目の前の大きな窓の棧がけて容赦なく落ちてくる雨がぐりを、ただただ途方に暮れて眺めています。顔つきだけはプロっぽく。

「何か…あつけなかつたですね。」と仰った。
外は蝉の鳴き声が聞こえるのんびりとした昼下がり。91歳だった。
翌日、スミ子さんは家に帰る事になった。
送り出す前に職員の首頭で馴染みのある人が集まり、お別れの会を開いた。
スミ子さんの好きな葡萄と熱いお茶を全員でいただき、五年六か月の思い出を語り合う。
ひとりひとりがスミ子さんへ献花し、自分の言葉でお別れの挨拶をした。
「母はここを選んだのだと思います。願いが全て叶いました。ありがとうございます。」
集いの場に迎える朝は、座ってもらう椅子から考え、使うクッションを工夫した。姿勢が崩れると一人が抱き上げて、その間にもう一人がクッションの位置を整えた。
傷口はきれいに洗い流し、軟膏を塗り保護材を貼り代える。
トイレにはちゃんと行く。

「何か…あつけなかつたですね。」と仰った。
外は蝉の鳴き声が聞こえるのんびりとした昼下がり。91歳だった。
翌日、スミ子さんは家に帰る事になった。
送り出す前に職員の首頭で馴染みのある人が集まり、お別れの会を開いた。
スミ子さんの好きな葡萄と熱いお茶を全員でいただき、五年六か月の思い出を語り合う。
ひとりひとりがスミ子さんへ献花し、自分の言葉でお別れの挨拶をした。
「母はここを選んだのだと思います。願いが全て叶いました。ありがとうございます。」
集いの場に迎える朝は、座ってもらう椅子から考え、使うクッションを工夫した。姿勢が崩れると一人が抱き上げて、その間にもう一人がクッションの位置を整えた。
傷口はきれいに洗い流し、軟膏を塗り保護材を貼り代える。
トイレにはちゃんと行く。

「何か…あつけなかつたですね。」と仰った。
外は蝉の鳴き声が聞こえるのんびりとした昼下がり。91歳だった。
翌日、スミ子さんは家に帰る事になった。
送り出す前に職員の首頭で馴染みのある人が集まり、お別れの会を開いた。
スミ子さんの好きな葡萄と熱いお茶を全員でいただき、五年六か月の思い出を語り合う。
ひとりひとりがスミ子さんへ献花し、自分の言葉でお別れの挨拶をした。
「母はここを選んだのだと思います。願いが全て叶いました。ありがとうございます。」
集いの場に迎える朝は、座ってもらう椅子から考え、使うクッションを工夫した。姿勢が崩れると一人が抱き上げて、その間にもう一人がクッションの位置を整えた。
傷口はきれいに洗い流し、軟膏を塗り保護材を貼り代える。
トイレにはちゃんと行く。

よりあいの食事はお年寄り一人一人に合った食事の在り方を心掛けています。
何処でも当たり前前に心掛けていることではないか、と思われるかもしれませんが、確かにそうだろうと思います。お年寄りがより快適に食事ができるように、食べる場所・時間・使うもの等、その方に合わせて考えられていることでしょう。…とは言え、お家でご飯を食べるとき、自分たちはどんなものでご飯を食べているのでしょうか？それぞれではあると思いますが、例えば器がプラスチック、お箸やスプーンがシリコン製で食べるとするならば、何をもちいて使うのでしょうか？それが使いやすい？落として割れにくい？口に当たって痛くない？などでしょうか。もちろんそんな理由でそれらを使う方もおられるでしょう。私が専門学校に通っていた時に、ある施設へ実習に行かせていただきました。そこでもお年寄りにあった介助をされているという事で、学びの為に食事のお手伝いをする事

になりました。
あるお年寄りが食事をされる際、シリコンのスプーンを使われていて、単純に何でだろう？と思いついた。確かに返ってきた言葉に正直ショックを感じたのを覚えています。「この人は口を開けてくれないからスプーンを口に入れる時当たっても大丈夫なようにこれを使っています。安全だから」というものでした。

お年寄りに合わせることで感覚がずれている様に感じましたが、実習生という事もあり、その時はモヤモヤとしたものを感じたままでいました。よりあいで、どなたもそのような道具は使わず、いわゆる普通の陶器などの器を使い、金属のスプーンやお箸を使って食事をされます。自分で箸やお箸を持つのが難しいような方も、器を変えを持つて食べられます。でもそれは、同じ陶器などの器を小さめのにしたり、軽めのものに変えると言うものです。
食欲があり、ご飯を食べるという事は生きていく喜びにも繋がる大切なことです。何に気を付けるべきかはそれぞれ違うでしょう。でもこちらの都合や間違つた解釈で、お年寄りに関わらないように心掛けたいな、と思つています。
千原佳子（入職2年）

このたび第2宅老所よりあいのつうしん担当となりまして、昨年からの縁あつてよりあいに勤務しているペーペーのくせに、職員であることを半ば忘却し、お年寄りの間に完全なまでに溶け込み、ちよつかり充実した楽しいよりあいの生活を送らせていただいております。それゆえに今回のつうしん課への突然の配属は、「ちよつとはまじめな仕事をしなさい」というお告げであると、そのように受け止めております。
私はもともと発信力に乏しく覇気のないもやしっ子なのですが、よりあいの歴史と共に脈々と続いてきたつうしんが、今後も宅老所の日常を広く知っていただくと同時に、お年寄りに関わることで見えてきた社会が抱える様々な課題を、読者の皆様と一緒に考え、深めていけるようなプラットフォームになればいいなと考えています。
敬愛している小説家の保坂和志さんは、「プロとは経験を頼りにためらわずに自ら仕上げてしまおうな人間のことではない、戸惑い途方に暮れるようなやり方を自分から引き受けられる人間のことだ」と仰つていました。
入職して2年、よりあいに關わる諸先輩方の在り方は、まさにこの言葉を体現しているように感じています。
そして刻々と締め切りが迫つてきている現在、私はパソコンのキーボードに指をのせたまま、隣接する五社神社の巨木から、目の前の大きな窓の棧がけて容赦なく落ちてくる雨がぐりを、ただただ途方に暮れて眺めています。顔つきだけはプロっぽく。

たたみさん

長い時間をお年寄りと接していると「老い」とは日々の僅かな変化の積み重ねであることを実感します。座ること。歩くこと。立つこと。昨日は上手くいったことも、今日はなぜか出来なかつたりする。



歩くときに掴まる場所が必要になる。誰かに手を引いてもらう。這つて移動する。車椅子に乗せてもらう。膝が痛いから座るときには椅子が必要になる。椅子に座ることさえ疲れてくる。やがて、一日のほとんどを横になって過ごすようになる。

私たちはその人の今にとって、より良い環境とは何かを絶えず模索し続け、老いの僅かな変化に添うことを大事にしています。

その変化を人知れず支えてくれているのが、実は「畳」なのです。

もし共同生活の場がリノリウムの床だったら、下に座っている人や這つてトイレに向かう人には、周囲から「なぜ」という「！」や「？」が否応なしに向けられることとなります。でも、くたびれてへたりこむことや、手を付いて移動することは、老いの変化の過程ではごく自然な行爲であるはずで

宅老所の広間や個室にはすべて畳が敷いてあり、お年寄りはその上でため息をついて寝そべったり、椅子からそのまま四つん這いになって湯飲みや新聞を取りに行ったりします。このひとつひとつの主体的な自由な動作を繰り返しながら、思うように動かなくなつていく自分の身体を、時間をかけて少しずつ受け入れていきます。その受容を通してお年寄りが老いを生きている姿は、私にはとても尊いものに思えてくるのです。

ありがとう、たたみさん。

依 奈緒美



「あいつうしん」
このたび第2宅老所よりあいのつうしん担当となりまして、昨年からの縁あつてよりあいに勤務しているペーペーのくせに、職員であることを半ば忘却し、お年寄りの間に完全なまでに溶け込み、ちよつかり充実した楽しいよりあいの生活を送らせていただいております。それゆえに今回のつうしん課への突然の配属は、「ちよつとはまじめな仕事をしなさい」というお告げであると、そのように受け止めております。
私はもともと発信力に乏しく覇気のないもやしっ子なのですが、よりあいの歴史と共に脈々と続いてきたつうしんが、今後も宅老所の日常を広く知っていただくと同時に、お年寄りに関わることで見えてきた社会が抱える様々な課題を、読者の皆様と一緒に考え、深めていけるようなプラットフォームになればいいなと考えています。
敬愛している小説家の保坂和志さんは、「プロとは経験を頼りにためらわずに自ら仕上げてしまおうな人間のことではない、戸惑い途方に暮れるようなやり方を自分から引き受けられる人間のことだ」と仰つていました。
入職して2年、よりあいに關わる諸先輩方の在り方は、まさにこの言葉を体現しているように感じています。
そして刻々と締め切りが迫つてきている現在、私はパソコンのキーボードに指をのせたまま、隣接する五社神社の巨木から、目の前の大きな窓の棧がけて容赦なく落ちてくる雨がぐりを、ただただ途方に暮れて眺めています。顔つきだけはプロっぽく。

